

●評者  
小林隆児  
佐川眞太郎

●内海 健著

## 『自閉症スペクトラムの精神病理』

星をつぐ人たちのために

本書はわが国で成人の自閉症スペクトラム(ASD)について本格的に論じた最初の精神病理学的論考ではなからうか。著者はわが国の精神病理学を牽引してきた著名な研究者のひとりで、これまでも統合失調症や双極性障害、さらには精神科臨床全般にわたって様々な論考を著してきた方である。

評者はこのような書が発刊されるのを久しく待ち望んでいた。これまでASDを乳幼児期から前方視的にみてきた評者にとって、成人を中心にみている精神科医には成人ASDがどのように映っているのか、そしてその精神病理はどのように捉えられているのか、ぜひとも知りたいと思っていたからである。

歯切れの良い文体で、読み応えの

ある書物に仕上がっている。とりわけ読者の目を引くのは、冒頭の章で、これまで多くの自閉症研究者が飛びついていた(いまでもそうだが)「心の理論」障害仮説に対して、その理論的根拠を一刀両断していることである。この指摘はなかなか鋭い。バロン・コーエンらが三〇年近く前に提唱した「心の理論」障害仮説の論拠となつた「サリー—アン問題」で「子どもに問われているのは、サリーの心の状態であり、それに基づいてサリーはどのようにふるまうかを『推論』することである」(二二頁)。つまり、「サリー—アン問題」の解き方として示される推論過程は、自明なことをあらためて振り返って、どのような解に至ったのかを説明するものである。つま

り事後的に構成された推論(一八頁)だという。しかし、われわれがASDの精神病理について本当に知りたいのは、彼らが「他者にころがある」ことをわかっているか否かという問題である。「他者にころがある」ことをわかるのは「直観」であつて「推論」ではない。ASDの人たちは「他者にころがある」ことを直観的にはわからなくても、「推論」することはできる。彼らの中に一定程度加齢とともに「サリー—アン問題」を通過することができるとなるのはそのためである。著者は喝破する。

この論考を皮切りに、著者はASD者の精神病理の成り立ちを「直観」と「推論」の両次元の関係を軸に論じている。この視点は重要で、本書の最大の特徴といつてもよい。たとえば、コミュニケーションの問題を、従来の言語的／非言語的コミュニケーションという見方を批判し、本来比較すべきはサリーヴァンのいうヴォーカル・コミュニケーション

ンであると指摘する。後者のコミュニケーションは感性的なもので、ASD者ではいまでも強く働いている。彼らの様々な対人反応が一見特異的にみえるのはそのような理由に依っていることが少なくない。同様の切り口とともに「共感」と訳されてきた sympathy と empathy の違いをも論じ、ASD者は sympathy は可能でも empathy は困難である。なぜなら empathy は「ころがある」ことを直観的にわかることによつて初めて可能だからともいう。

では彼らになぜわれわれのような共同性をもつ言葉の獲得を前提とした言語／非言語的コミュニケーションが困難なのか。その根本原因は、彼らが「他者にころがある」ことを直観的にわからないからだろう。では定型者が「他者にころがある」ことを直観的にはわかるようになるのはなぜか。その直接的契機となるのは、他者からのまなざしを受け取る体験だという。自己は他者のまなざしがこちらに向かつてくる志



医学書院、2015年  
3500円（税別）

向性によって触発されることにより生成する。その体験は自己の最も奥底に他者のしるした痕跡として残る。それを著者は「ゆ（フアイ）」と命名し、ASDではこれが未形成なままで成長を遂げる。ここに著者はASD者の中核の精神病理を据えている。「視線触発」は村上靖彦著『自閉症の現象学』からの引用で、著者にいわせれば本書の論考での「ほぼ唯一の仮説」だという。なぜならそれは「私」（という意識が生まれること）に先行する。「超越論的（Ⅱ経験が可能にする）」あるいは「先験的Ⅱ経験に先立っている」な次元のことである。それ自体は経験できない。それゆえ仮説の域に留まらざるをえないというわけである。

「ASDの乳児もあやされれば笑う」（一二八頁）のは共鳴と呼ばれる現象で、こころを介さないでも起こる。ASDの成因に関しては、九月革命と述べている人見知り現象が起きる契機となる「視線触発」にもとづく体験をもち得ていないことに依っている著者は主張する。しかし、それ自体は先験的事柄であるゆえ、それを（治療的）経験を通して獲得することはできないことには生得的な障碍説に近い。それゆえ、ASDに対する治療は彼らの特性を理解し、適応的なものになるように支えることが中心になる。

以上、本書のモチーフを紹介したが、評者が疑問に思う点をいくつか述べてみよう。

その一つは、著者の精神病理学的論考の根拠、つまりエヴィデンスをどこに置いているのかということである。本書の論述を特徴づけているのは vignette（スケッチ風の小品文、特に簡潔な人物描写）の多用である。そこで成人ASDの言動の特徴や彼ら自身の語りが数多く述べられている。その中には自験例の提示も少なくないが、もつとも目を引くのはわが国も含め世界中で出版された成人ASDの人たちの自伝からの引用の多さである。その引用自体が悪いと評者は言いたいのではない。ただ、ここで気をつけなければなら

ないのは、自験例であれ、成人ASDの人たちの自伝であれ、患者や当事者が語った内容のみをエヴィデンスとすることに孕まれた問題である。成人ASDの人たちの自伝を対象とすることの最大の強みは、当事者自身の語りをもつ迫真性にあることは間違いない。それゆえ自伝をもとにこれまでも様々な自閉症論が語られてきたわけだが、評者が指摘したいのは、当事者（患者）自身は気づかないが、第三者には気づかされる、そのような臨床体験が治療者には必ずあることである。なかでもとりわけ強調したいのは、面接において患者と治療者双方が体験している「あいだ」（木村敏）ないし「接面」（鯨岡峻）での事象である。それは両者のあいだで立ち上がるころの動きである。実はASDに限らずいかなる病態の患者であつても、精神病理学・精神療法研究においてそのことは極めて重要な意味をもつ。評者はそこにこそ精神病理学を始めたとする人間科学におけるエヴィデンスがあると考えているからである。本書での論考の肝心の「視線触発」は仮説であるゆえ、読者は自らの実践を通してそのことの是非を

確かめる術がない。そのため共通了解の道は閉ざされることになる。つきに取り上げたいのは、そもそもこころはどのようなプロセスを経て成り立つのかという問題である。著者自身も「子どもは自分に起こった出来事を母からの応答から事後的に了解する」（二一〇頁）ことの重要性を論じている。具体的には、空腹で泣いている子どもに、母親が授乳によって応えることによつて、子どもは初めて自分の空腹感に気づくことができる。このような母子交流によつて子どもは育まれていく。この際、とりわけ重要なことは、母親が子どもの世話に没頭し（ウイニコット）、成り込み（鯨岡）、子どもの気持ちを言葉で返す（映し返す）ことである。子ども自身が体験してはいてもその（共同的）意味がわからない状態にあつて、そのことに気づくことができるのはこのような養育者の関わりを通してである。ここで評者が強調したいのは、母親は生まれたばかりの子どもであつてもそこにこころを感じ取りながら世話をする。生まれたばかりの新生児の笑い（に見える反応）を生理的反応であるといった冷

## 『新訂 自閉症』

めたまなきしを向けるわけではない。最初から子どもはこころをもつ存在であることを当然のこととして育児に没頭する。このことが子どもこころを育む上でもっとも大切なことである。この交流は情動中心の世界で、そこでは直観が重要な役割を果たしている。

そこで本書を振り返ってみると、評者が常々取り上げている「情動(的)」「コミュニケーション」なる用語に対して、著者は「情動」という言葉は若干生々しい(一一八頁)と述べているように、vignetteで「情動」的なものはほとんど取り上げていない。それなりの理由があつてのことだと思ふ。

土居健郎は生前弟子たちに「君ねえ、精神療法はハラハラドキドキなんだよ」「精神療法はね、出たとこ勝負だよ」「すべてはアフエクト(情動)だよ」と常々口にしていたという(二〇一四年一〇月開催の日本精神病理学会での藤山直樹氏による教育講演から)。「甘え」理論の提唱者らしい話である。患者と治療者間の「接面」での情動(甘え)のありようを捉えることこそが精神療法の核心だとの思いから発したせりふ

である。評者も「甘え」の重要性に着目し、ASDの乳幼児期に甘えのアンビヴァレンスが母子関係の病理の中核に働いていることを見出すとともに、アンビヴァレンスという情動の動きに着目することによって、患者と治療者間に「甘え」を介した情動水準での関わりが拓かれることを実感してきた。このような臨床を実践するには、ASD者にもこころがあることをわれわれ治療者も直観的にわかつていることが前提となる。

以上、本書を精読することによって評者は己の臨床を相対化し、改めて考え直す機会がもてた。著者の努力に感謝したい。ASD者の精神病理の探求はこころの成り立ちを考え、る上でも格好のテーマである。本書の刊行によつてASD者の精神病理への関心が高まることが期待される。

小林隆児

(こばやし・りゅうじ／西南学院大学大学院人間科学研究科)

子どもの心の発達について「子どもが母親との心のつながりができ、母親を通して内面的な豊かさを身につけていき、ことばを習得し、知的にも、社会的にも発達していくという道筋はけっして単純なものではないのです」とし、自閉症について「精神発達の過程が足踏みしたり、ゆらんでいる子どもたちがいても決して不思議ではないのです」と語りかけます。

「はじめに」で、本書の出版に至る経緯とともに著者の率直な思いや考えに触れ、ほのぼのとした気持ちでページを捲ると第一章の冒頭でこの言葉が飛び込んできます。驚き、頷き、「その通りだ」と、一人嬉しくなりました。さらに、続けて乳幼児期の精神発達について、精神分析家であるマーガレット・マラーの分離-個体化理論を下敷きに、母親との心のつながりとともに進む発達の様子を描き出します。新鮮でした。私

が教育センターで臨床心理実践に従事するようになった二〇〇〇年当時すでに、自閉症は生得的な「中枢神経系の何らかの機能不全」が「推定される」障害であり、教育的療育的関わりが主たる支援として位置づけられ、母親との心のつながりとともに進む発達という観点などほとんど耳にすることはない状況だったからです。

著者は五〇年以上、児童精神科医として子ども心に向き合い続けてきました。本書は一九八〇年に、そのものずばり、「自閉症」というタイトルの冠して出版された初版に、新たに「中期自閉症」としての生涯発達」という章を加え、新訂版として甦りました。私は不勉強で初版の『自閉症』を読んだことはなかったのですが、いくつかの著作に触れ、著者が自閉症についてどのような考えをおられるのか、常々強い関心を抱いていました。

自閉症は、その基本的病態や原因





日本評論社、2016年  
1700円(税別)

について紆余曲折しながら現在に至ります。自閉症における諸説を整理していく際に、「基本的病態は何か」、「原因は何か」という問いが常につきまといまいます。本書では、まず、カナーの疾病概念を基に、症候学的、疫学的観点から自閉症の特徴に迫ります。そして、第四章で、まさに「自閉症の基本的病態と原因」というタイトルで有力とされる仮説を取り上げ、その妥当性を検証していきます。その後、医療の枠組みを越えた様々なアプローチが症例とともに描かれています。自閉症をめぐる諸説とアプローチを概観できる内容となつていますが、同時に、自閉症の子どもを目の前にして、より良い、より確かな関わりのあり方を試行錯誤してきた著者の歴史、道程を垣間見たような気がします。心因論や遊戯療法への批判を取り上げ、教育訓練的なアプローチを示しながらも、「教育訓練的な働きかけにしても、人間が人間に対して行う心理的な操

作であることには変わりはないのですから、精神療法的に相手を受け止めようとする姿勢が最も大切なことであることにはかわりない」と説きまします。ところどころに著者の逡巡や葛藤が感じられ、そこに臨床の息遣いが伝わってくるように思ふのです。現在では、自閉症の原因については先ほども述べた通り、生得的な「中枢神経系の何らかの機能不全」が「推定される」という考えが支配的です。そして基本的病態については、本書でも取り上げられている認知・言語障害説以降、心の理論の障害、共同注意の障害、情動調整の障害などの仮説が唱えられてきました。しかしながら、こうした仮説や原因論に一貫している姿勢は、常に子ども側の発達の問題としてのみ取り上げられていることであり、私はそこに大きな疑問を感じます。

先日、ある施設で子どもの発達に悩みを抱える養育者とその子どもの関わりを見学する機会を得ました。何組かの親子とスタッフが遊びに興じている場面でした。しばらくして、じつとせず動き回り、誰かれ構わず愛想を振りまく子どもに目が留まりました。「多動」や「人見知りし

ない」といったことが気になりました。子どもの様子だけをみれば、ADHDや自閉症スペクトラムを容易に想定していたでしょう。しかし、一緒にいた養育者(お母さん)に目を移すと、明らかに不安そうな様子で身体に力が入っています。子どもがときおり思い出したように抱きつきにいきます。すると、一生懸命笑みを浮かべてはいるものの、やはり動きがぎこちなく戸惑う様子が伝わってきました。私はとても苦しい気持ちになりました。そして、当初は「多動」や「人見知りしない」としてみえていた子どもの振る舞いが違ってみえてきました。子どもなりに何かしら察して、気遣って振る舞っているようにみえてきたのです。自閉症が語られる際、カナーの示した疾病概念、あるいは「心因論」に対する批判の影響があるのでしようか。子どもに見られる特徴的な行動のみを取り上げることが多いように思えます。しかし、私は同時にその特徴の「地」になつている部分についても知りたいと思うのです。なぜなら、先ほど示した親子のエピソードのように、「地」の模様次第で「図」の見え方が変わってくるからです。発達とは何か、冒頭の言葉に、常に戻りたいと思うのです。著者はこうした自閉症論の紆余曲折をくぐり抜け、いまなお自閉症に向き合っています。三〇年、四〇年の月日を経て、当時の子どもたちが中年期を迎える中で、彼らの支えとして在り続けているのです。補章として、新訂版に追記されています。著者だからこそ表現できる、中年期の自閉症の人々の姿がそこにあります。具体的なやりとりとともに著者の率直な思いや考えが語られ、その場の様子がありありと伝わってきます。自分自身の思いや考えを通して語ることによつて初めて相手の姿が現れてくるのだと、つくづく思われます。より新しいものが即ちより正しいものとされるような風潮がありま

す。しかし、本書を通読すると、はたしてそうなのか、これまで積み重ねられてきた知見を丁寧に吟味していくことの大切さを、まさにそのように自閉症と向き合ってきた著者の姿勢から思い知らされるのです。

佐川眞太郎

(さがわ・しんたろう／東洋大学朝霞キャンパス学生相談室)